

## 『燃えつきた地図』における聴覚的表現

徐 洪  
(2002年9月30日受理)

Expressions by acoustic images in Abe Kobo's "Moetsukitachizu"

Hong Seo

It has been pointed out that in Abe Kobo very efficiently used expressions by visual images or acoustic images in his books. Previous studies on "Moetsukitachizu" mainly focused on the expression by visual images related to metaphors of color. However, I found that in "Moetsukitachizu", the expressions by acoustic images is the main effects of sense through the entire book. Two characteristics of acoustic images are non-discrimination-of-direction (It can be heard regardless of listener's directions.) and non-discrimination-of-intention (It can be heard regardless of listener's intention.). These characteristics of acoustic images effectively demonstrated the main theme, disappear that only result exists without cause.

Key words: acoustic image, non-discrimination-of-direction, non-discrimination-of-intention, disappear

キーワード：聴覚的イメージ、無方向性、不測性、失踪

### 1. はじめに

『燃えつきた地図』は、いなくなった夫を探す女から依頼を受けた私立探偵である「ほく」により語られる物語である。ほく、女、女の弟、失踪人の会社の部下である田代の四人を中心に物語は展開される。そして、主要登場人物と言えるこの四人の人物は、形は違うが、全員失踪同然の状態になっていく。

女は生きてはいるが、その存在を証明してくれるものは役所の証明書だけの存在であり、弟ははっきりした理由もなく殺害されてしまう。また、田代は自殺を予告する電話を掛けたまま、自殺してしまう。そして、物語の最後では、探偵自信も記憶喪失という状態になってしまう。このように『燃えつきた地図』は様々な形の失踪で満たされている。

安部公房の小説には「視覚的効果あるいは聴覚的効果を十分に計算した上で書かれているものが少なくない<sup>1)</sup>」という指摘がなされている。ところで、『燃えつきた地図』論の中で論じられてきた感覚表現は、主に色彩と関わる視覚的表現であると思う<sup>2)</sup>。

しかし、本作品においては聴覚的表現が本作品に描

かれている様々な形の失踪をより浮き彫りにする効果的な表現として働いているように思われる。

以下その実体を明らかにしていきたいと思う。

なお、本文の引用は『安部公房全集』第21巻（新潮社、1999）により、下線は筆者。

### 2. 物語の展開と関わる聴覚的表現

聴覚的表現は、物語の始めから終わりまで満遍なく現れ、物語の展開において欠かせない表現として働いていると言える。

#### 2.1. 内的思考の断絶と関わる聴覚的表現

本作品は探偵である「ほく」により語られるが、主に探偵の内的思考により物語が進行するため、物語は全体的に停滞しているような平面的な印象を与える。

ところで、探偵の内的思考の中に物語が閉じ込められているようなとき、他の人物の登場により、探偵の内的思考は断絶される。そして、その他の人物はいつも聴覚的表現を伴って登場することが指摘できる。

## (例文1)

道の表面は、アスファルトではなく、目の荒いコンクリートで固められ、スリップ防止の目的だろう、十センチほどの間隔で細いみぞが刻み込まれている。しかし、歩行者のためには、さほど役に立ってくれそうにない。(中略)同時に思わず、急ブレーキを踏んでいた。ローラースケートを尻にしていた少年が、警笛の口まねをしながら、とつぜんカーブの向こうから現れ、すべり降りて来たのである。(p.116)

## (例文2)

この通りを軸に、団地は大きく両翼をひろげ、奥行きよりもむしろ幅のほうが、広いらしいのだが、採光のためだろう、たがい違いにずらして建ててあるので、左右の見透かしは、ただ乳色の天蓋を支える、白い壁面があるだけだ。誰も付き添い人のいない、赤い乳母車の中で、頭からシーツをかぶった赤ん坊が、金切声をあげて泣いている。銀色に光る変速機つきの軽合金自転車に乗った少年が、わざとらしい高笑いを投げつけながら、寒さに頬を染めてその傍を駆け抜ける。(p.117)

## (例文3)

焦点が合うどころか、カーブの向こうの台地の町は、上等の消しゴムでこすりつづけているように、ますます空白感を増すばかりだ。色が消え、輪郭が消え、形が消え、ついには存在そのものまで消えてしまいそうだ。坂の下から、靴音が近づいてくる。書類鞆を左の小脇にかかえ、右手にこうもり傘をついた勤め人ふうの男が、ぼくを追い越していく。(p.296)

つめていた息を、我慢しきれなくなって、吐き出してしまふ。追いぬいていた、こうもり傘の男と入れ違いに、にぎりしめた財布のなかで小銭をじゃらつかせながら、長い緑のジャケットを着た少女が、はねるような足取りで駆け下りていく。手品のように、たえず誰かが、消えた街の向こうに消えていき、かわりに、誰かが、消えた街から現れる。(p.297)

(例文1)はこの作品の冒頭部である。探偵が依頼人の家を訪ねていく途中の描写から始まって、探偵の目に映った道の風景とその風景から受けた印象が探偵の内的思考の形で続く。その時、警笛の口まねをする少年が現れ、そこで探偵の内的思考は途切れるようになる。

(例文2)は依頼人の住んでいるアパートを訪問する場面であるが、そのアパートは視覚的に認識され、

その認識は探偵の内的思考に繋がる。ところが、その探偵の内的思考の中に金切声で泣く赤ん坊とわざとらしい高笑いをする少年が現れることにより、その内的思考はまたも途切れてしまう。

(例文3)は、喫茶店〈つばき〉で受けた暴行により、記憶を失い、世界との関わりも失い、ますます自分の内的思考の中に閉じ込められていく探偵の内的思考が、男の靴音と少女の小銭をじゃらつかせる音により中断される場面として考えられる。

以上の例文から考察したように、この作品での聴覚的表現は探偵の内的思考を途切れさせることにより、探偵の頭だけに存在し、頭の中だけで流れているような物語の時間を、外部との関わりをもたせる表現として作用していると考えられる。

つまり、探偵の内的思考に所々で飛び込んでくる聴覚的表現は、停滞しがちな物語に時間の流れを垣間見させると同時に、探偵の内的世界の描写の多用により平面的になりがちなこの作品の文体に変化や緊張感をもたらしていると考えられる。

## 2.2. 認識の転換と関わる聴覚的表現

多様な聴覚的表現の中には、認識の転換に働きかける聴覚的表現がある。

## (例文4)

彼女が、その死の衣装とともに引き返してくれば、それで部屋の空気は、またもとどおり、行き苦しいゼラチンの液で充満させられてしまうのだ……電話が鳴り始める。孤島のような、レモン色の部屋の印象を破って、外の世界が、黒い孔を空ける。(p.249)

## (例文5)

二階で誰かの足音がしている。足音は、ゆっくりこちらに近づき、ぼくの真上で止まり、同じ速度で引き返して行く。ぼくも、もうたちつくしてはいない。驚きがすぎてしまえば、うちよせた波と同じで、すぐまた元の水位に戻ってしまうのだ。(p.208)

## (例文6)

だが、どちらを見渡しても、無人であることには、変わりなく、ぼくは言いようのない恐怖におそわれる。(中略)

期待に胸をはずませながら、道路を横切り、コーヒー店のドアを押す。すると期待にたがわず、やっと生きている人間と顔を合わせることができたのだ。正面の止まり木に高く膝を組んでかけている、小娘の

ような首の細い女。

同時に、ラジオのスイッチを入れたように、いきなり騒音が沸きあがり、振り向くと、黒い網のカーテン越しに、通りには人が行き交い、車の列が切れ目なく流れつづけている。(p.299)

(例文4)では、探偵にとって静まり返っている女の部屋ははまるでゼラチン液の中のように世界と断絶された場所のように感じられる。ところで、そこで鳴り出した電話ベルは、探偵の認識に働きかけ、女の部屋は世界と関係を持つものとして認識されるようになる。

(例文5)では、女の弟が死んだという話を聞いて驚きのあまりたちつくしてしまった探偵に、二階からの足音が聞こえる。そして、その音は探偵に「もうたちつくしてはいない」という認識の転換を促している。

(例文6)では、記憶を失った探偵の前で世界は停止したものであり、探偵はその世界の中をさま迷っている。それは「まるで事物を描き忘れた風景の画の中にはまりこんでしまった」ような世界であって、探偵はそのような状況で「葉書のように、記憶のどこかに残っている風景」と思われる喫茶店に入る。そこでラジオの騒音が沸きあがり、その騒音と同時に世界は再び動き出し、停止していた世界から再び動きのある世界へと探偵の認識は転換されるようになる。

聴覚的表現は、探偵の認識に働きかけ、既存の認識に変化をもたらしたり、認識の転換を促したりする表現として作用していると言える。

### 2.3. 登場人物の認識手段としての聴覚的表現

語り手である探偵は、「さすがに地獄耳じゃないか」と言われたり、「入社試験のときに、ほかに取柄はなかったけど、なぜか聞き込みの点数だけは、満点でね……」と自分で言うように、聴覚に敏感な人物として提示されている。そして、そのような探偵にとって、声とは他の人物を認識する際に、欠かせない重要な手段として働くようになる。

(例文7)

女はささやくような、かすれ声で話す。緊張のせいではなく、それが地声らしい。多少舌が短いのか、飴でもしゃぶっているように、ぼくをほっとくつろがせてくれる。(p.119)

(例文8)

聞き覚えのある声。どもっているわけではないが、口に唾をためたような、にごった調子(p.138)

(例文9)

ぼくとならんで、ソファの入り口に近い端に腰をかけ、しきりに眼がねを押し上げながら、鼻にかかった高めの声で、しかし意外によどみのない返答ぶりである。(p.147)

(例文10)

- (1) 多少関東訛の残っている、娘の声を背中に聞きながら、通り出ると
- (2) おおよそ事務的な、乾いた調子の声が、とつぜん割り込んでくる
- (3) 誰だ、この灰色の子豚は？聞き覚えのある声……  
そうだ昨夜のマイクロバスの屋台のおやじじゃないか……声をきかなかつたら、多分思い出せなかつただろう……
- (4) 主任は、その眠ったような姿勢のまま、小さな薄目を開けて、皮肉な含み笑いをもらし、風邪をひいた犬そっくりの、しわがれ声で、

(例文7)は依頼人である女と最初に会った場面での女についての印象であり、(例文8)は弟との初対面の場面である。そして(例文9)は田代との初対面での場面である。3人の主要登場人物への認識にその声が大事な手段になっていることが分かる。

また、声は主要登場人物においてだけではなく、脇役の人物の認識においても欠かせない要素である。

(例文10)は各々脇役の人物と言える喫茶店《つばき》の女店員、写真集のモデル、屋台のおやじ、探偵事務所の主任についての認識である。

### 2.4. 連想作用としての聴覚的表現

連想を呼び起こすことにより、物語の展開に関わる聴覚的表現がある。

(例文11)

- (1) なんの音だろう？その音は、すぐカーテンの向こうの、台所の辺から聞こえてくるようだ。おし殺した、気配の中から、いやでも聞き分けられる、微かなガラス器の触れ合う音……液体と空気の、あの独特な摩擦音……ビールが、これほど侘しげな、すすり泣くような音をたてるものとは知らなかつた……
- (2) 「ビールの一本くらい、かまわないだろう。」  
べつにそんな誘いに乗ったわけではない。(p.180)

探偵はM燃料店で女の弟に会った後、女の家を訪ねる。(1)は女の家での場面である。(2)はその日の昼間の

M燃料店での弟との出会いの場面である。ところで、(1)でのビールを注ぐ音からの連想により、「ビールの一本くらいかまわないだろう。」という弟の言葉を思い出すようになる。そして、(1)の場面は、(2)の場面へと転換され、物語は逆戻りして展開するようになる。

## (例文12)

前を通るときも、彼女はほとんど姿勢を変えなかった。突き出した膝が、ぼくの肘をかすめそうになっても、よけようとする気配さえ見せない。

唇をすぼめて、口のなかを陰圧にしたまま、急に唇をゆるめて、軽く接吻するような音をたてた。

(中略)

ぼくが黙って千円札を出すと、女も黙って、釣銭をくれた。口こそきかなかったが、例のやり方で、また三度唇を鳴らした。(pp.306~307)

記憶を失いかけている探偵が入った店の中には、失踪人の妻である女がいた。その前日、探偵と女は夫婦のような関係になっていたが、記憶を失った探偵は、その女が誰であるか思い出せない。しかし、そんな状況でも探偵はその女から、「やはり、鍵をにぎっているのは、この女なのかもしれない」という印象を受ける。記憶を取り戻そうとする探偵はポケットの中のものを取り出して調べる。しかし、「ポケットから出した、テーブルの上の品物などよりも、はるかに重要な手掛かりかもしれない」のは女であるように思われる。

探偵はその女に答えを求めて、女を見つめつづける。このような探偵への答えとして、女は接吻するような音を出しながら口を鳴らすのである。つまり、女は探偵の視線に対して、その答えとして口を鳴らしていると言える。その音は、探偵に昨夜のことを思い出させ、二人の関係を連想させることになり、それは探偵の視線に対する答えになるはずであった。しかし、すでに記憶を失った探偵においてそれは「あいさつのようにもあったが、だとすると、ずいぶん危険なあいさつもあったものである。」という危険表示のようにしか聞こえないのである。物語の終わりになっていくにつれて記憶を失ってしまった探偵には、もはやこれ以上、連想を呼び起こすことができなくなるのであろう。

### 3. 聴覚的表現の現われ方

物語のはじめから終わりまで現われ、物語を展開させる表現として働く聴覚的表現は、その現われ方にくつつかの特徴を指摘することができる。

#### 3.1. 「見る」という視覚的行為の否定

本作品の中で、色彩のイメージによる視覚的表現が主題との関わりから欠かせない感覚表現として働いていることは、すでに指摘されている通りである<sup>3)</sup>。しかし、イメージとしてではなく、「見る」という行為からの視覚的表現はしきりに否定されていると言える。

## (例文13)

彼女がカーテンの向うに消えると、いっしょに彼女の印象までが、急にかすかに曖昧になる。(中略)

ぼくは、はっきり彼女を見たにちがいないのに……すくなくも、テーブル越しに、椅子をすすめてくれたとき、ほとんどニメートル足らずの距離で正面から顔をあわせたはずなのに…… (p.120)

## (例文14)

誰だ、この灰色の小豚は？聞き覚えのある声……そうだ、昨夜のマイクロバスの屋台のおやじじゃないか……声を聞かなかったら、多分思い出せなかっただろう (p.230)

## (例文15)

手にふれ、眼でたしかめることのできる、唯一の証拠品。無数の仮説を一つの焦点にしぼり、実体化することが出来る、唯一のレンズ、真実らしいものを模した無数の平面図の中で、このマッチ箱に投影されているものだけが、唯一の極彩色立体写真なのだ。(p.154)

「こだわらないことですよ。固定観念は、とにかくよくない。ぼくも、例のおあずかりしたマッチ箱を、あなたに決定的に不利な証拠物件だと、ついさっきまで、思い込んでいたくらいですから。(中略)

この疑いも、さっきのアルバムで、まったく根拠がなくなりました。(中略)

固定観念のいい見本だな。」(p.253)

(例文13)では、探偵は近い距離で女を見たが、女が目の前からいなくなると、女の顔を思い出せなくなる。

(例文14)では、探偵は女の弟の葬式で会った男が誰であるかを思い出せなくて困っている。ところで、その人物の声を聞くことにより、その男が先日屋台で会った人物であることを思い出しているのである。

また、(例文15)では、探偵は失踪人を探すための手掛かりとして最後まで持っていたマッチ箱さえも、つまり目で確かめることの出来る唯一なものであると思っ

ていたものさえも、結局は単なる固定観念であったことを告白している場面である。

このように、本作品の中での目で見るという行為は不確かなことであり、信じられない行為となっている。そして、視覚の働かないようになったその分だけ聴覚的認識はより敏感になるのであろう。

### 3.2. 副詞と関わる聴覚的表現

本作品においての聴覚的表現は「とつぜん」、「いきなり」、「急に」などの「ある事態が瞬間的に成立する」<sup>4)</sup>ことを表す副詞と共に現れる傾向があることが指摘できる。いくつかの例をあげてみる。

(例文16)

- (1) とつぜん、けたたましいクラクションの音に、さえぎられる。(p.175)
- (2) とつぜん、サイレンが鳴り渡り、黒い空一面に共鳴していた、機械やエンジンのうなりが、ひっそりと息をひそめる。(p.181)
- (3) 彼女は急に声をはずませて笑い (p.252)
- (4) いきなり、ひどく楽天的な驚きの声に、ぼくの気負いは軽くそらされてしまう。(p.248)
- (5) 同時に、ラジオのスイッチを入れたように、いきなり騒音が沸きあがり、振り向くと、黒い網のカーテン越しに、通りには人が行き交い (p.299)
- (6) とつぜん、テーブルの上のカップが、皿ごと音をたてて跳ね上がる。(p.301)

とつぜん何かが起こる状況を想像してみよう。とつぜん起こるその状況を認識するのは、どのような感覚がより認知しやすいのだろうか。それは、聴覚ではなかろうか。視覚による認知が可能な世界は、視野に入る範囲に限られている。しかし、聴覚にはそのような範囲の制限はない。それは、方向性を持たず、拒否できない感覚であり、一方的であるとも言えよう。

ある日、予告もなく、理由もなく「とつぜん」起きた「失踪」という状況を語るのに、聴覚的表現はより効果的な感覚表現のように思われる。

また、失踪人の妻である女は自分の夫の失踪を、「ええ、本当に、もう魔法にかけられた鼠の群みたい……ほら、何かそんな童話、ご存知ないかしら……」と認識している。女にとって自分の夫の失踪とは、目には見えない笛の音によっていなくなったハーメルンの童話の鼠たちと同じようなこととして感じているのである。つまり、それは目には見えない、実体を掴むことのできない聴覚的な感覚のようなことであると言えよう。

### 3.3. 比喩による聴覚的表現

本作品における聴覚的表現のもう一つの特徴として、多くの場合、聴覚的表現は比喩により提示されていることが指摘できる。

(例17)

- (1) やつと列車が走り去る。あとに、耳に飛び込んだ虫のような音を残して (p.150)
- (2) ふと、運転席側のドアに、濡れたスポンジを叩きつけるような音がした。(p.153)
- (3) その小型バスは、金ノコを引くような音を立てながら、(p.192)
- (4) 扇風機の羽に、針金をつつこんだような音をたてて、エンジンが鳴り、絆創膏を引き剥がすような音を立てて、タイヤが鳴る。(p.226)
- (5) 錆びたような声の調子は、まったく普段と変わらず、(p.229)

以上の例文からも分かるように、比喩により、提示されている音や声は、何ひとつ気持ちのいい肯定的な音がない。多くが金属的な音に例えられ、勘にさわるような、気になる、刺激的で否定的な音で提示されている。

聴覚的表現を比喩により提示することにより、一旦語り手である探偵の中で否定的な音として咀嚼し提示することができたと考えられる。

つまり、一旦、否定的な音として咀嚼されて提示された聴覚的表現は、決して肯定できず、理解もできない「失踪」という状況をより浮き彫りにしているように思われる。

## 4. 終わりに

「失踪」とは何だろう。それは理由の分からないことであり、原因はなく結果だけが存在することであろう。そして、そのような状況の中で人々は不安や戸惑いを感じるだろう。それは本作品の登場人物達も同じである。

このような不可解さ、不安、戸惑いなどで満ちた『燃えつきた地図』では、聴覚的表現を主な感覚表現として用いることにより、本作品の中の様々な失踪という状況をより浮き彫りにして提示することができたと考えられる。

つまり、本作品においては、認知に範囲の制限がないという全方向性、聞く側の意志とは無関係に提示され得るという一方向性などの特徴をもつ聴覚という感覚を作品全体を通して主な表現として用いており、さ

らに、それを「見る」という視覚的行為の否定の上に成り立たせることにより聴覚の特徴はより際立つようになる。

そして、このような聴覚の特徴とより結びつきやすい語彙と言える「ある事態が瞬間的に成立する」ことを現す副詞である「とつぜん」「急に」「いきなり」などとの共起により聴覚的表現を提示することにより、ある日突然起きたとしか言えない「失踪」という本作品の内容はより浮き彫りにされていると考えられる。

さらに、それは、比喩をもって語り手の中で否定的な音として咀嚼して提示されることにより、決して肯定的には受け入れられない「失踪」というその状況ないし、安部公房が『燃えつきた地図』を通して描こうとした「人間疎外」<sup>5)</sup>という主題をより鮮やかに提示することができたのではないだろうかと考えられる。

### 【注】

- 1) 武田勝彦, 「西欧の批評にみる安部公房」, 『国文学 解釈と教材の研究』, 1972, 9月臨時増刊号, p.214
- 2) 鶴田欣也は, 「燃えつきた地図論」の中で(『芥川・川端・三島・安部—現代日本文学作品論』, 桜桐社, 1973) 本作品の主題と色彩との関わりについて次のように述べている。「根室の妻は, 多分この小説の

テーマを理解する上で, 主人公に次いで重要な人物である。調査員が彼女の住んでいる団地に近づいていく時, 彼女の世界は妙に白が目立っているということに読者は気付く。(中略) 白という色の象徴は, 恐らく黒の持つ作用に対照することで確保される。我々は黒が失踪人の妻の弟, 《つばき》という喫茶店, 壁などが持っている意味と結びついていることを思い起こす。だから, この作品においては黒は前述したように, 視野を広げることや流動に対してのある強い障害であることを暗示している。根室の妻をとりまいている白は, その正反対の意味をもっているようだ。」

3) 前掲の2)

4) 国広哲彌編, 『言葉の意味3』, 平凡社, 1987

5) ウィリアム・カリ, 安西鉄雄訳, 『疎外の構図—安部公房・ベケット・カフカの小説』, 新潮社, 1975

### 【参考文献】

- 岡庭昇, 『花田清輝と安部公房』, 第三文明社, 1980  
 高野斗志美, 『安部公房論』, サンリオン山梨シルクセンター, 1971  
 日本文学研究刊行会篇, 『安部公房・大江健三郎』, 有精堂, 1974

(主任指導教官 町 博光)